

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

先史・歴史：虚構としてのアボリジニ女性像：  
20世紀初期の写真絵葉書にみられるイメージの文化  
人類学的分析

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ニコラス, ピーターソン, 細川, 弘明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/3590">http://hdl.handle.net/10502/3590</a>

## 虚構としてのアボリジニ女性像

—20世紀初期の写真絵葉書にみられるイメージの文化人類学的分析<sup>1)</sup>—

ニコラス・ピータスン\*・(翻訳) 細川 弘明\*\*

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| I. はじめに             | IV. 女らしさと魅力の欠如というイメージ |
| II. 絵葉書大量使用の背景      | V. 性的対象としてのアボリジニ女性像   |
| III. 母親としてのアボリジニ女性像 | VI. 結論                |

### I. はじめに

今世紀はじめの20年間に、実に大量の写真絵葉書<sup>2)</sup>が世界中を流通した。絵葉書のこの爆発的流行期は、写真というものが、真の意味で商業的かつ通俗的に利用された最初の機会でもあった。本論文では、この時期の絵葉書にあらわれるアボリジニ女性のイメージの分析を通じて、アボリジニ女性に対する当時の [ヨーロッパ系オーストラリア人社会の] 平均的な態度がどのようなものであったかを明らかにする。

絵葉書というものは、その性質上、誰の目に触れても差し支えないものでなければならぬと同時に、また、不特定多数の買い手の注意をひく必要もある。絵 (写真) がひとめ見て意味の分かるものでなければ、その絵葉書はあまり売れない。これに加えて、たいいていの絵葉書には、ひとつ、時には二つの、説明のための語句 (readings) がついている。ひとつは、発行者がつける標題 (キャプション) であり、もうひとつは、絵葉書の利用者 (発信者) が書き添える文面である。この2通りの情報源により、個々の写真の意味をめぐる時代背景を理解することが、確実にではないまでも、容易にはなる。そしてまた、写真そのものが、絵葉書の流通過程において、どのように読

\* オーストラリア国立大学 先史学・人類学科

\*\* 東京外国語大学 外国語学部

1) [訳注] 原題 *Constructions of Aboriginal femininity in early twentieth century photography*. なお、本文中、[……] の部分は訳者による補足である。訳出に際し、訳者のこまかい質問に辛抱強く答えてくださった著者に感謝する。

2) [訳注] 以下、たんに「絵葉書」と和訳するが、本論文であつかわれる絵葉書の実例の大部分は、写真 (ないし手がきで修正をほどこした写真) を用いた絵葉書 (picture cards) である。

みとられたかを推察する手掛りとなるのである。

今日、絵葉書を店頭で選ぶ人々の様子を観察しても分かることだが、私たちが絵葉書の画像を見るのに費やす時間は、せいぜい数秒間にすぎない。このことは、分析方法の問題につながる。というのも、ここでの目的は、洗練された学識と感受性をそなえた特殊専門的な読み手として画像を解釈することではなく、当時の絵葉書の買い手であった普通の人々がこれらの画像からどのようなイメージを受けとったかを解明することにあるからである。人々が絵葉書を選んで買う、という簡単な行為の裏にひそむ社会的な意味というものは、社会学者による手間ひま掛けた分析によってのみ解明されるものである。しかし、そのような分析は、当時の常識的な理解をこえた深読みを犯す危険をも孕んでいる。本稿では、画像が生み出す表面的なイメージから、なるべくかけ離れないような分析を試みるつもりである。

以下、写真の事例分析にはいる前に、まず、絵葉書が大量使用された背景を概観し、また、それに関連して、分析方法上の問題について述べる。次に、個々の事例を検討しながら、まず、母親としてのアボリジニ女性をめぐる【ステレオタイプ化された】イメージ、ついで、女性として、そしてまた性的興味の焦点としてのアボリジニに対する社会意識を、順次分析していく。

## Ⅱ. 絵葉書大量使用の背景

絵葉書がもっとも流行したのは1900年から1914年にかけての時期であり、オーストラリアではとりわけ1906年から1908年にかけてがピークであった。表1の統計は、ニューサウスウェールズ州内で投函あるいは受領された絵葉書の数(使用数)を示す(これには州外および海外との郵便も含まれている)。1905年に使用数が急増しているのは、郵便規則の変更にともない、【今日私たちがしているように】宛名書きを絵葉書片面の半分のスペースに縮め、残り半分のスペースに文面を書いてもよくなったことと関係がある。これによって、裏面全体を絵・写真が占めることが可能になったのである。もっとも使用数が多かった時期、ニューサウスウェールズ州では、単純計算でいえば、全人口ひとりあたり年10通の割合で絵葉書が使用されたことになる。

写真を使った絵葉書には2種類のものがある。ひとつは写真を製版印刷したもの、もうひとつは印画紙に焼きつけた写真を葉書として直接使用する場合(直焼き)である。印刷ものは、商業的に発行され、流通する絵葉書のほとんどを占めた。詳しい記録は残っていないが、絵葉書1種類あたりの平均的な発行数は約1万枚ほどだったよ

表1 ニューサウスウェールズ州における絵葉書の年次別利用数（1910-1910年）  
および標本資料の年次別分布

年 度	使用枚数 (発信数+受信数)	内 訳 (%)			標 本 数*	
		州 内	他 州	海 外	印 刷	直 焼
1900	1,473,410	85.3	9.9	4.8	0	0
1901	1,630,490	88.4	6.5	5.1	0	0
1902	1,734,340	87.1	6.8	6.0	1	0
1904	3,263,264	63.5	19.8	16.8	22	0
1905	8,382,282	60.8	21.1	18.2	27	3
1906	12,621,096	72.6	16.4	10.9	16	1
1907	15,097,710	67.0	25.4	7.5	15	3
1908	14,969,312	61.3	25.4	13.3	10	1
1909	12,511,546	71.5	16.1	12.4	12	2
1910	12,438,544	66.2	21.3	12.6	6	2

[資料]: ニューサウスウェールズ州統計局資料 (NSW Statistical Register, Sydney: Government Printer)による。

\* 分析資料とした絵葉書のうち、日付けの明記されているもの

うである。もっとも、英国では、特別人気のある絵葉書が1年で100万枚以上売れることもあった。

一方、直焼き写真による絵葉書は、多くの場合、アマチュア写真家たちが自分たちのとったスナップ写真を焼きつけた印画紙をそのまま絵葉書に転用したものであった。もっとも、プロの写真家たちの中にも、直焼き写真による絵葉書を作成・販売した人々がないわけではなかった。絵葉書作成にあたっての平均的な焼き増し枚数がどれぐらいであったかについては、やはり、ほとんど記録が無いが、ビクトリア州の一事例によれば、一回に200枚焼き付けたという記録がある。直焼きものの流通範囲はきわめて限られたと考えられる。

印刷ものが、必ずといっていいほど、標題を伴っているのに対して、直焼きものに製作者が標題をつけることは稀であった。さらに重要な差異として、直焼きものは、印刷ものにくらべて、総体として、アボリジニの人々をより好意的に描いたものが多い。

本論文の分析対象となる資料は、印刷もの絵葉書399枚と直焼きもの絵葉書160枚からなる。これは、この時期に発行された、アボリジニを描写した絵葉書の総体を反映する資料としては、無作為抽出ではないにしても、分量としては妥当な資料体を構成するものと思われる。実際のところ、[アボリジニを素材にした]絵葉書が全部でどれぐらい存在したのか、その数は知るべくもないのであるが、今回の調査を通じて、

異なる種類の絵葉書に遭遇する頻度から経験的に推定する限り、1900年から1920年までの時期に出回った絵葉書のうちアボリジニを素材にしたものは、多くみても1000種類以下と考えられる<sup>3)</sup>。

今回分析の対象とした絵葉書（標本群）の投函年の分布とニューサウスウェールズ全体における絵葉書利用数の年次ごとの盛衰を比べてみると、両者のあいだに、おおまかなながらも、相関性を読みとることができる（表1）。本論文であつかう標本群の資料としての妥当性は、この点でも、ある程度まで保証されている。

絵葉書のうち、実際に郵便葉書として投函されたのは、印刷ものでは3分の1、直焼きものでは7分の1にすぎない。多くの場合、人々は買った絵葉書をアルバムに直接貼りつけるか、あるいは、一枚ないし数枚を組みあわせて封筒に入れて親類知人あてに発送した。後者の場合、受取人は趣味で絵葉書を収集している人々だったことが、封入された絵葉書の文面から窺える。

アボリジニを素材にした絵葉書の約3分の1（印刷もので33%、直焼きもので31%）は、女性を描いたものだった。それらは、子供を伴うものもあれば、そうでないものもあった。男性と女性の被写体が（同じく子供の有無をとわず）混在する写真は、今回あつかう資料全体の6割までを占める。

### Ⅲ. 母親としてのアボリジニ女性像

子連れの女性を描いた27点の絵葉書写真のうち、それが母親であることを明記してあるのがわずか2点にすぎないというのは、注目すべきことである。第一の事例では、標題に添えられた【4行にわたる】解題の文章のなかに「母親」（mother）という語があらわれる（写真1）。標題である「アボリジニ、彼らにとって初めての写真」（Aborigines, Their First Photo）という表現は、この女性を未開人と決めつけるものであるが、それは、彼女が裸であることによって、一層強調される。第二の事例では、標題に「お母さん」（mummy）という言葉が使われてはいるものの、その使い方は曖昧である（写真2）。この絵葉書が直焼き写真によるものであることに注意されたい。写真3、4、5も、明らかに母子とおぼしき被写体を描いた直焼き絵葉書の例である。これらの写真では、アボリジニ女性が好意的に描かれている。とりわけ、写

3) 【原注】なお、資料のなかには、同じ種類の絵葉書が異なる使用者によって用いられているケースもあるが、今回の分析では、【資料体の内訳を算出するにあたって】資料収集に際して最初に遭遇したものを対象とした。したがって、投函使用分と未投函分との比率（後述）もそのようにして算定した。

真4の例では、他の多くの場合ではアボリジニが無名の存在としてのみ写されているのとは対照的に、被写体の名前が（ファーストネームだけではあるが）記されている。

【子連れ女性を被写体とした絵葉書のうち】他の例はすべて印刷ものである。その大半は好意的な画像ではあるが、その標題のつけかたは、「オーストラリア原住民の女と子供」（Australian Aboriginal Lubra and Piccaning [sic]）（写真5）、「原住民の女と子供」（Lubra and Picaninny）<sup>4)</sup>（写真6）、「原住民女と子供、南オーストラリア州マレー河にて」（Lubra and Child, River Murray S.A.）（写真8）などのように、漠然とした表現に終始している。印刷もの絵葉書の場合、子連れアボリジニ女性の描き方には典型的な2つの様式がある。一方では、女と子供たちが裸、あるいはそれに近い格好で写されている（写真1、写真6、写真7）。他方では、女は衣服をまとい、たいていの場合、子供を背中におぶっている（写真5、写真8）。裸の画像は、育児という行動の生物学的な面を強調しているようであり、そして、写真7の標題「クインズランド北部の原住民」からも分かる通り、大人と子供の被写体を区別せずに【ひっくるめて原住民、アボリジニとだけ】形容している。着衣の画像は、往々にして、アボリジニの慣習の奇異な面を強調している。

被写体が子供を背中にしょった大人の女たちである場合、そのイメージはより社会的な性質をおびることになる。このような写真は、一方では、見る者にとって、人間として共通のやさしさと愛情をただちに喚起するものではあるが、他方、女たちが子供を背負っている姿は、ある種の違和感（disjunction）をひきおこす。というのは、オーストラリアの白人社会では、子供を背負うのは、遊び、戯れあいの方法として行われるのが普通だからである。しかし、これらの写真では、子供を毛布などでぐるんで保護していることから、これがこの人々の通常の子供の運びかたであることが読みとれる。このような【アボリジニにとってはごく当り前の】子供の背負い方は、【白人にとっては】“戯れあい”，つまり、大人が一時的に幼くふるまうような状況を連想させるものである。絵葉書にみられるような子供の背負い方は、大人らしい行動ではない、ということになる。したがって、外見からすれば大人である被写体のアボリジニ女性たちは、より子供っぽく、単純で、原始的な存在としてイメージされることになる。このような感じ方は、母親が背中に何かを乗せたままでの姿勢が、【西欧人にとっては】なにか駄獣を連想させるがゆえに、いっそう強固なものとなる。

4) 【訳注】ピキニニ（pikinini — picaninny, piccaning などとも綴られる）は、もともと船乗り言葉で現地の子供を意味する。ポルトガル語 pequeno 「小さい」に由来する語といわれる。オーストラリア俗語としては、特にアボリジニの子供をさす場合が多い。

このように、絵葉書が生みだすイメージにおいては、アボリジニ女性の母親としての姿が真面目に受け取られなかった。このことは、ろうそくの宣伝用に印刷された絵葉書の事例（写真6）に端的にみてとることができる。いわく「停電のときはエレクトライン印のろうそくをどうぞ!」(in a black-out use Electrinc Candles)。ここでは、「停電、暗闇」(black-out)をアボリジニ (blacks) とをだぶらせる言葉遊びに輪をかけて、絵の遊びもみられる。被写体の女性が下半身に毛皮をまとった様は、あたかも溶け落ちたロウがロウソクの根元に溜まったかのようなのである。絵葉書の標題には、この女性が母親であることを示すいかなる言葉もみられない。この点は、後述のように、[ステレオタイプとしての]アボリジニ女性像が構築される過程と関連している。

#### Ⅳ. 女らしさと魅力の欠如というイメージ

「醜いアボリジニ女性」というテーマは多くの絵葉書に通底している。描かれる姿はさまざまであるが、共通しているのは、アボリジニ女性が、白人にとっての女らしさの理想にそぐわないものとして描かれている点である。ほとんどの写真について言えることだが、被写体となるアボリジニは、たいていの場合、当時、普通の白人が写真にあらわれるときの身なりに比べて、はるかに粗末な身なりで写されている。それだけではなく、アボリジニ女性がパイプをふかしている姿、地べたに座っている姿、らくだ引きを務める姿、あるいは被写体の美醜そのものを判定するための写真などが絵葉書をかざった。これらは明らかにヨーロッパ流の美の通念とは合致しない女性像であった。

年配のアボリジニ女性を被写体とした写真のほとんどに、すべてのアボリジニ女性がそうであるかのような含みをもつ標題が与えられている理由も、そのあたりにあると思われる（写真9）。標題がそうになっていない場合でも、絵葉書の送り手がそのような解釈を明言している場合がある。アボリジニ女性の容貌そのものに言及した事例が3つある。第一のものは、若い、非常に色の黒いアボリジニ女性の肖像を白い背景に対照させている（写真10）。標題には「彼女はめいっばい色白でした」(She was fair, as fair could be)とある。このあざけるような調子は、この写真がまさに「アボリジニは黒くて醜いという」白人社会の通念を確認しているにすぎないことを示している。2番めの例（写真11）では標題に「土地の美人」(A Native Beauty)という表現が用いられているが、この絵葉書の差出人はこの標題を言葉通りには受けとっていない。「最近撮影の傑作だ。君もきっといい写真だと思にちがいない (Result

of my latest visit to photograph-her [sic]. I am sure you will admire it)。」という文面(写真11)は、もちろん冗談のつもりなのだろう。3番めの例は、「オーストラリア美人さまざま」(写真12)と題されているが、そこには、「!」付きで書かれてもおかしくないような含みがある。わざわざ強調の符号をつけるまでもない、ということであろう。

絵葉書の標題では、アボリジニの女たちは、たいてい、「土人女 (Gins)」、「原住民女 (Lubras)」、あるいは単に「オーストラリア原住民 (Australian Aboriginals)」などと呼ばれ、「女性」(women)と書かれることは稀であった。2例だけ「淑女たち」(Ladies)という表現を用いたものがあるが、いずれの場合も、被写体がいかに「淑女」からほど遠いかを強調するあからさまな反語として用いられている(写真13)。無署名の差出人が男性の友人に書き送った文面にも、「“現地の”淑女」の反語性は明瞭に示されている。

親愛なるドンへ、

淋しがらなくてもいいよ。この裏手には君のお相手が沢山いるんだからね。(1907年発信の事例)

アボリジニ女性に対するこのような否定的な態度は、「典型的な光景。ニューサウスウェールズ原住民の女たちと犬」(A Typical Scene. N.S.W. Aboriginal Lubras and Dog)と題された絵葉書(写真14)の標題そのもの、そして使用者による書きこみにも読みとることができる。この写真では、二人のアボリジニ女性が、樹を背にして、大きな犬と並んでカメラに向かってしている。標題のいう「典型的」というのが具体的に何をさしているのかは判然としないが、女たちが地面にじかに座っている点、そして、彼女たちと犬の親密さをさしている可能性はある。この絵葉書の発信者は次のように書いている。

この土人女たち (gins or Lubras) はポチャとして可愛いけど、キスしてみろと言われてるとちょっと困るね。こいつらの歯は真珠のように輝かしくて、笑うとダイヤのようにキラキラするんだけど、その笑い方ときたら凄じいものさ。ニューサウスウェールズには野兎や狐がいるが、見てのとおり、グレイハウンドまでいるというわけだ。

この女たちは牧場の下働きの連中で、牧場主の奥さんに言われてお上品な服を着てるんだけど、いったんブッシュに戻れば、服を脱いで木のうろに隠してしまうんだ。そんなふう

に時たまブッシュに戻るのを大目に見てやらないと、あいつらは皆んな牧場から逃げ出してしまおうね。そういう野蛮な奴らなのさ。

エドワード王時代<sup>5)</sup>の頃までは、ふっくらしていることは美男美女の条件であった [STEELE 1985: 218-20] ので、「ポチャッと可愛い」(nice and fat) という表現は、文字通りの好意的な評価であって、にわかには皮肉とは言えないかもしれない。しかし、「キスしてみろと言われると…」と続く文面から、その含意は明白と言うべきだろう。彼女たちの真珠のように輝かしい歯は、笑うときしか見えないけれど、「その笑い方ときたら凄じい」というわけである。これには、アボリジニの女たちは感情・欲望表現の抑制に乏しい、という意味が込められている。これは、後に挙げる事例でも見られるように、彼女たちが性的に放漫であるとする通念につながる見方に他ならない。彼女たちの服装が「お上品」(like tofs) だと言うのは、もちろん揶揄である。彼女たちの身なりが貴婦人のようであっても、その本性はまったく異なる、と決めつけられる。お里に帰れば彼女たちはすぐ裸になり、その人間らしさの度合いは犬並みと看做されるからである。このように、文面の冒頭にあるような好感のもてる「女性」というイメージとは裏腹な外見と行動と本性が、あからさまに述べられるのである。

【女性のイメージに】違和感を抱かせるように、より巧妙な工夫をこらしているのが、写真15に示す横顔のポートレート写真である。被写体は、ほとんどヨーロッパ人に近い顔だちの女性である。この女性は魅力的で若々しいが、口に啞えたパイプは、彼女の女らしくない野卑な習癖を強調し、この絵葉書を手にとって見る人々に違和感を抱かせる効果がある。「タイヤーズ湖地方のキティー」(Kitty, of Lake Tyers) という題のついた例(写真16)では、違和感をしくむ意図がもっと明瞭に読みとれる。めずらしく被写体の個人名を明記しているのは、彼女の顔が毛深いので、被写体が男か女か【ヨーロッパ人には】分かりにくいせいかもしれない。【ヨーロッパ人がこの写真をみて受ける印象を】決定づけるように強調されているのは、彼女が目を細め、下くちびるを突き出していることにも窺えるような、反抗的で刺々しい目つきである。

上にみてきたような様々な含意は、アボリジニ女性を描いた写真のほとんどに潜伏している。画像そのものにはっきりと読みとれないまでも、写真の標題をみれば、そこにどういった態度が潜んでいたか、ほとんどの場合、明白である。そのことを象徴するのが写真17の例である。この写真が印象的なのは、当時のものとしては極めて珍し

5) [訳注] 19世紀中頃から20世紀初頭までにかけての「裕福さ」を重視する世相をさす。エドワード7世の在位期間にちなんでこのように表現される。

く、本当のスナップ写真 (snapshot) であって、被写体の現実の動きが感じられるせいもある。堂々と歩く若い女性が、カメラのほうに体をむけている。標題には「カルグーリのくろんぼ娘」(Nigger Girl, Kalgoorlie) とあるが、このような語句は、当時ですら、十分に侮蔑的なものだったのである。

次に挙げる【写真ではなく絵による】絵葉書 (写真18) には、このような一連の社会意識が明白にみうけられる。当然ながら、画像の構成要素すべてを完全にコントロールするという点で、描画は事物を写真よりも意図的に描きだす傾向がある。そのため、描画は往々にして、特定の社会意識の原型を示すことがある。この「ジンを水割りで」(Gin and Water)<sup>6)</sup> という題の絵葉書 (写真18) は【アボリジニに対する当時の】社会意識のいくつかと見事に符合する。まず、酒を連想させる語呂あわせの標題。アボリジニの酒飲みをジンの水割りの消費者になぞらえることによって、間接的に、彼らの社会的地位の低さが示唆される<sup>7)</sup>。そして、不潔で体など洗わないと信じられているアボリジニの女が水につかっているという意外性。「沐浴する美女」(bathing belle) という【ヨーロッパ流の】理想像に、明らかにそうではない女性をあてはめる諸謔。また、描かれた女が一見して裸で泳いでいるのには、控えめながら、性的な意味合いもある。アボリジニ女性たちは、ジンをしたたか飲まされたあげく、ヨーロッパ人の男たちと“裸のつきあい”に及ばされたのであった<sup>8)</sup>。そして最後に、ジンという酒には「母親の破滅」(mother's ruin) という異名があることにひっかけて、アボリジニ女は母親失格だという通念がまたもや顔をのぞかせる。

## V. 性的対象としてのアボリジニ女性像

大多数の絵葉書では、アボリジニ女性が女らしさに欠けるものとして描かれ、また、その魅力のなさが含意されていた。しかし、一方では、明らかに多くの人々の性的な興味をかきたてるような写真もまた存在したのである。もっとも、アボリジニ女性とおおっぴらに付き合ったり同棲したりすることは、ひどく蔑まれた行為であり、「同棲野郎」(combo)<sup>9)</sup>呼ばわりされることは、白人仲間からのつまはじきを意味した。今世紀のはじめ、アボリジニとの性交によって性病が蔓延するのではないか、という

6) [訳注] アボリジニ女を意味する侮蔑語 gin と酒のジンの語呂あわせ。

7) [原注] イギリスでは、ジンは下層階級の飲む酒とされる。

8) [原注] ヨロッパ人の男たちは、しばしば、性行為と交換に(あるいは、実質的にそういう目論見のもとに) アボリジニにジンを飲ませた。

9) [訳注] アボリジニ女性と暮らす白人男性をさす。

危惧がひろまったことがある。もっとも、感染経路は、アボリジニではなく、他の有色「劣等」人種だと一般には信じられていたのであるが [EVANS *et al.* 1975: 353, 362]。しかし、性にかかわる問題は、[公の弁論の場では] ごく注意深くあつかわねばならなかった。そのため、この件に関して、心中憂える人は多かったとしても、公然たる議論が沸きたつことはなかったのである [EVANS *et al.* 1975: 362]。性にまつわる議論が当時のブルジョワ誌紙の表面に出なかったのに対して、絵葉書として流布した写真、その標題、そして文面の数々は、この点、はるかに直接的であった。

写真19の絵葉書では、白人の男たちがアボリジニの女たちと写っている。明らかに彼らは同棲関係にあるらしい。標題は「オーストラリアの内陸奥深くにて」(In the Far Interior of Australia)。2人のヨーロッパ人男性がそれぞれアボリジニ女性と並んでおり、それとは別にアボリジニの男たちが3人、背後にひかえている<sup>10)</sup>。この画像は手描きで採色されているため、写真というよりも、むしろ水彩画のように見える。これは、写真を絵のように見せるため、つまり、この「絵」が奥地 (the outback) の想像上の姿を描いているという印象を与えるためになされた、おそらくは意図的な処置である。しかし、実際には、この「絵」はリバモア (W. Livermore) が1890年にグレン・イニスの西、約50キロ<sup>11)</sup>にあるレザージャケット牧場 (Leatherjacket, あるいは Blackfellow Ranges) で撮影した写真を修正加工したものである。この写真の標題が言わんとするところは、明らかである。アボリジニとの同棲は、もっぱら「奥地」の習慣である。奥地には白人の女がいないので、白人の男たちは、アボリジニの男たちの妻を横どりするのである。この写真で注目すべき点は、白人の男が、横に立つアボリジニ女性の肩に腕をまわしている様子である。このようなしぐさは、他ならず、両者がうちとけた間柄にあることを示すものである。

白人とアボリジニの被写体を、両者の性的関係を明らかに語るような形で呈示した写真の例は、この他にひとつしかない。それは写真20a-cに示す3枚組絵葉書の1枚である。この組写真の標題から、これらが芝居がかった画像であることは、明白である。すなわち「舞踏会の前」(写真20a)、「舞踏会の後」(写真20b)、そして「ママにきいて」(写真20c)。被写体は、舞踏会の身仕度を整えたアボリジニ女性である。髪をととのえ、真珠の首飾りをつけ、手袋をはめ、扇を携え、白い靴をはき、そして手首にはダンス・カードをつるしている。3枚のうち1枚めの写真では、彼女ひとりが

10) [訳注] 3人ともいかにもわざとらしいポーズをとっていることに注意。

11) [訳注] グレン・イニス (Glen Innes) は、ニューサウスウェールズ州、ニューイングランド地方にある町。19世紀中頃に開拓された。

写っており、いざ出かけようというところ。2枚めには、舞踏会を終え、物憂げにダンス・カードを眺める彼女の姿。そして3枚めでは、スーツを着た、あきらかに白人と思われる男が、彼女にひざまづき、手をとって結婚の申込みをしている。前掲の「オーストラリアの内陸奥深くにて」(写真19)が、大陸の奥地で実際におきた事態を記録し、いわば、人々にとって周知のことがらを確認しているのに対し、この3枚組写真の情景は、いかにもヤラセじみており、【白人の男が正装をしてアボリジニ女性に求婚するという】当時まず有りえなかった状況を描いて、滑稽さをねらっている。

性の相手として見られたのは奥地のアボリジニだけではない。すでにヨーロッパ人女性が定着していた都市部でさえも、ヨーロッパ人女性がいらないから、という口実がまかり通らなくなっていたにも拘わらず、アボリジニ女性は性の対象とされた。写真21の絵葉書では、清楚な服装の、髪もきれいに整えた2人のアボリジニ女性が、小川の岸辺とおぼしき茂みでポーズをとっている。この写真そのものは好意的なまなざしで撮影されたものであろうし、彼女たちもカメラマンに微笑みかけている。しかし、この絵葉書には、撮影当初の意図がいかにも善意に満ちたものであったとしても、それを台無しにしてしまうような標題が与えられた。すなわち、「現地のお相手 (Native Companions)」。この標題はたちどころに一連の連想をよびおこす。2人の女性、2人の連れ、2人の接待役、2羽の足の長い鳥<sup>12)</sup>、2人の女友達、そして、これらからただちに連想されるのは、動物の王国を思わせるような野趣に満ちた性的関係を提供するという評判の「現地のお相手」<sup>13)</sup>である。

この野生のセクシュアリティ (untamed sexuality) というテーマは、また別の事例でも読みとることができる。そこでは、野外を舞台に、恥部を隠すだけの前垂れをまとった9人の女が被写体である (写真23)。彼女らが撮影されたのは、その容貌のためでないことは確かである。モデルのひとりには、まだ前垂れをつける動作を終えていないようである。ということは、この写真がとられる寸前までは、彼女もほかの女たちも、全裸であったと想像される。それで、この写真を見る人々は、この女性たちと写真家とのあいだの、写真撮影に先だつ関係性を共有することになる<sup>14)</sup>。この絵

12) [原注] Native Companion というのは Brolga の別名；[訳注] Brolga (和名オーストラリアヅル) は、オーストラリアとニューギニアに固有の大型のヅル (*Grus rubicundus*, fam. *Gruidae*)。英語名は Brolga だが、俗に Native Companion とも呼ばれる。足が細長いというこのヅルの特徴は、手足がすりと長いアボリジニの身体特徴を連想させる。

13) [訳注] もちろん、「現地」で白人男性の「お相手」をつとめさせられるアボリジニ女性をさす。

14) [訳注] 写真家 (男性) と彼女らのあいだに性行為があったという意味ではないが、カメラを構える男の眼前で女が一糸まとわぬ姿をさらすということは、それだけで男と女のあいだの性的関係性 (セクシュアリティ) を左右する出来事である。

葉書の標題は左右逆さに印刷されている。それは単なる印刷ミスかもしれないが、しかし、その内容からすれば、これは、性的な興味を皮肉に強調する手法であったかもしれない。「いやらしいことをお考えでしょうが、残念でした、この娘たちは実は純真無垢な野生の子供なのです! あはは」というわけである。このように、撮影者は、ふしだらな関係を連想させた責任を免れて、見る者をひっかけるのである。

次例の写真は、親しげな印象をよぶが、標題がついていない。前出「現地のお相手」(写真21)のモデルのひとりが、右腕を頭の後ろにやるという、いかにもあだっぽいポーズをとっている(写真22)。見ようによっては、気があるような風情(flirtatious)でもある。腕を頭の後ろにまわすという姿勢を女性がとるのは、【ヨーロッパのしぐさの文化においては】ひとりきり、あるいは、ごく親しい人だけがいる場面で、頭を支えて体を横たえるときに見られるくらいである。このような姿勢は、露出されざるものを露出する、つまり、実際に見える見えないに拘わらず、ワキの下とワキ毛を想起させ、さらには見る者の連想を恥部へと誘うことになる。そのことを念押しするように、彼女のスカートには、あたかも下腹部へ目をさそうためであるかのように、シダの葉があしらってある。この写真が醸し出すのは、私的かつ親密な出会いの雰囲気であり、それは、野外の茂みの中という場面設定によって、ひときわ濃厚となる。そこでは、見る者と見られる者とが、第三者の視線を気にせずに向かいあえるのである。この絵葉書を実際に使用した人々の文面(2例)も、以上のような分析と通じる内容となっている。第一の例では、育ちのよさそうな発信者(女性)が、葉書の写真そのものには触れないまま、題を書き加えている。いわく「オーストラリアの麗人」(An Australian Belle)。第二の例では、男性の発信者(チャーリー叔父さん)が、姪あてに次のように記している。

親愛なるオーリーへ、

こんな叔母さんは欲しくないかい。ダイナ叔母さんというのも悪くないだろう。彼女はメイベルにとってもよく似てると思わないかい。本人にきいてごらん。このお口の小さいところが特にね。チャーリー叔父さんより。(ヒーズヴィルにて、1913年1月25日)

この葉書の主は、写真の女性に対する性的興味を隠しきれず、読み手である自分の姪に「こんな叔母さんはどうだい」と訊ねてしまう。それはつまり、彼がこのアボリジニ女性を妻にするという事態を想像することに他ならない。しかし、そのような下品な含みを意識し、それを自ら否定するかのように、チャーリー叔父さんは、被写体の

「大きな口」をあざけるような軽口を叩いて、つじつまを合わせるのである。

次の例もまた特異で興味深い。それは、いずれも身なりの整った3人のアボリジニ女性と2人の白人女性が、野外の茂みで、樹の下につどう光景である(写真24)。白人女性のひとりがアボリジニ女性と手をつないでいること、また、別のアボリジニ女性がもうひとりの白人女性の肩に手をおいていることから、彼女たちがたがいに親しい仲であることが明らかにみてとれる。異人種の女性どうしの、このような親密で対等な関係は、とりわけアボリジニ女性の側が白人と積極的に交わろうという姿勢をみせる場合には、白人女性をアボリジニ女性と同じ性道徳上の地位におくことになる。この写真の標題に「オーストラリアの真珠」(Australian Pearls)という韻をふんだ俗語(rhyming slang)<sup>15)</sup>が用いられていることは、被写体の女たちの素姓の胡散臭さを強調している。そこに込められた皮肉は、はっきりしている。[オーストラリア固有の存在である]アボリジニ女性たちが「真珠のように白い」のであれば、白人女性たちは見かけほど「白い」存在ではなくなる。この絵葉書のある使用者は、このような含意をくみとって、標題の横に次の如く書きそえている。

Pearls(真珠)

Earls(伯爵)

Gearls(娘たち)

Wenches(卑女)<sup>16)</sup>

Tarts(売女)<sup>17)</sup>

この写真の被写体となった白人女性のひとりには、また別の写真にもあらわれる。ここでは、彼女はちゃんと着衣で立ち、傍らにはべる裸のアボリジニの女を見おろしている(写真25)。そのアボリジニ女性は、裸で、白人女性を見あげている。写真の題は、いみじくも「白黒の習作」(A Study in Black and White)。両者の対照という意味では、この写真の言わんとするところは明らかである。文明と未開、洗練と野卑というわけである。しかし、2人の女がたがいに微笑んで視線を交わしているさまを見るならば、そこに、この白人女性を不道徳な存在として印象づけようとする意図がある

15) [訳注] pearls はオーストラリア俗語で girls を意味する。

16) [原注] “wench” は下層階級の娘をさす俗語 (PARTRIDGE 1984 を参照)。(訳注) 転じて娼婦を意味することもある。

17) [原注] もともと親しみをこめて女性をさす言葉だったが、1880年代以降、語義が変化し、1904年までには、もっぱら不道徳な女性をさす語となっていた [PARTRIDGE 1984]。(訳注) オーストラリアでは、通例、娼婦をさす。

ことは、前出（写真24）の場合ほど顕著ではないにしても、明らかである。

アボリジニの被写体が裸であることにどういう意味があるかは、場合によっては、議論の余地がある。特に、裸をもつばら性的興味という面でのみ解釈すべきか、それとも、それ以外の要素、あるいは全く別の意味あいがあるのかが問題となる。今世紀のはじめあたりから、ヨーロッパ系以外の女性が裸の胸をさらした写真が出版物に掲載される機会はかなり多くなりつつあった。1903年には、『ナショナル・ジオグラフィック』誌が、“原住民”の女性のありのままの写真を掲載することを、編集方針として決定している。ほぼ同じ頃、ボールドウィン・スペンサー<sup>18)</sup>は、その初著『中部オーストラリアの原住民諸族』[SPENCER and GILLEN 1899]に掲載予定の写真に裸の女性が大勢写っていることを、かなり気にしていたのである [MULVANEY and CALABY 1985: 179-180]。この学術書は多くの人の目にふれることを前提に出版されるわけではなかったので、結局、それらの写真は掲載されたわけであるが。しかし、[当時、一般に]非ヨーロッパ人の裸に対して、強い性的な関心があったことは、疑いえない [ALLOULA 1987]。20世紀初頭、胸をはだけた白人女性の絵葉書が相当数流布したことを別とすれば、非ヨーロッパ系女性の裸の写真のほうが、白人女性の裸をうつした写真よりも、はるかに自由に出廻っていたのであった。

スペンサーとともにフィールドワークをおこなったギレン<sup>19)</sup>も裸のアボリジニ女性の写真を数多く撮った。彼は、回想談のなかで、彼が自分の家のメイド [をしていたアボリジニ女性] に裸の写真を撮らせてくれるよう頼んだ際、いかにはっきりと拒絶されたかを述べている [MULVANEY and CALABY 1985:116]。また、ホーン調査隊<sup>20)</sup>のメンバーであったウィネッケ (C. Winnecke) は、スペンサーが彼あてに一連の写真を送った際、「黒い美神 (dusky venus) が写っているのは、ただの一枚も」入っていなかったと言って憤慨し、写真を選ぶ目というものが全く欠けている、とスペンサーを詰問したのである。しかし、後に、スペンサーが追加の写真を送ると、ウィネッ

18) [訳注] Sir Walter Baldwin Spencer (1860-1929)。イギリス出身の動物学者・人類学者・探検家。メルボルン大学生物学講座の初代主任教授として活躍。1894年から1927年にかけてオーストラリア中部と北部を中心に、広範な実地調査をおこない、アボリジニの伝統生活についての数多くの写真資料を残した (WALKER and VANDERWAL 1987 を参照)。1929年、南米、フェゴ島への遠征中に客死した。

19) [訳注] Frank J. Gillen (1855-1912)。アリススプリングスの郵便局長をしていたギレンは、この地域のアボリジニの慣習にも精通していた。スペンサーは、ホーン調査隊 (後述) に参加した際、ギレンに出会い、アボリジニの伝統生活の奥深い豊さに開眼させられる。それまでスペンサーは、アボリジニよりも、むしろ有袋類の分類研究に興味をもっていたといわれる。

20) [訳注] 南オーストラリアの実業家ホーン (W. A. Horn) の資金援助により1894年に組織されたオーストラリア中央部への調査隊。スペンサーはその中心的な役割をはたした。

ケは次のような礼状を出すのであった。「お送りいただいた美しいビーナス達の写真のおかげで、私のコレクションも大変豊かになります。ギレン君ときたら、破れかけの写真 (delapidated specimens) を、それもほんの少ししかよこさないものだから」[Mulvaney and CALABY 1985:121]。

このような性的興味があからさまに読みとれる写真の例もいくつかある。それらの標題や添えられた文面も、それを補強している。ある例では、標題に「ビーナス」というが用いられている (写真26)。「アボリジニの」という限定句がついているものの、この写真が、アボリジニ女性の【性的な】魅力を認めたものであることは明らかである。諸事例中、もっとも扇情的といえるもの (写真27) は、前出「オーストラリア美人」(写真22) のヌード版といえる。腕はふたたび頭の後ろにまわり、胸がクローズアップされ、しかも視線は脇にそれているので、見る者は安心して存分にこの写真を眺めることができる。この類の写真に対する人々の反応は予想された通りのものであった。南オーストラリアのカンガルー石鹼工場 (Kangaroo Soap Works) で働く弟あてに出すのに写真28の絵葉書を選んだスパイダー夫人は、次のような文面をしたためている。

親愛なるジムへ、

この写真の子たち、どちらか気に入らないかしら？ウォルターはどの子も可愛いって言うてるわよ。でも、お願いだから、髪をむすんだほうのメリーちゃん<sup>21)</sup>はやめといてね。まあ、いいわ。どの子も気に入らないなら、もっと素敵な子を探しといてあげるわね。それじゃ。

絵葉書の使用者たちにはほとんど意識されないことであるが、こういった写真の本質は【アボリジニとヨーロッパ人のあいだの】搾取的な関係にある。例えば、写真29では、ワンピースの上半身部分がわざとはだけてある。そこに露出しているのは、被写体のアボリジニの娘たちと撮影者との間の地位・力関係の大きな落差に他ならない。

「オーストラリア美女の一典型」(A Type of Aboriginal Beauty) と題された絵葉書を送った某男性は、標題のところに次のように書き加えている (写真30)。

21) [原注] Mary という名前はアボリジニの女をさす俗語として用いられる。この葉書の原文では“little Mary”となっている。

ねえ、ハリー、キスしてよ。

あんたみたいに素敵な男の子はじめてよ。

そして、裏には、以下のような文面。

親愛なるハリー、

この絵葉書でもみて元気をだしてくれ。これで君の [絵葉書の] コレクションにも、オーストラリアの本物が加わるというわけだ。(後略)

H.G. より。

こういったヌード写真のモデルに、少なからぬ場合、アボリジニの老女が選ばれていること、また、必ずしも裸の胸が強調されているとは限らないことから考えると、場合によっては、裸は必ずしも性的な連想を惹起するためではなく、むしろ、アボリジニの未開さを表現したものであるかもしれない。そうであれば、それは、【ヨーロッパ人にアボリジニに対する】違和感を抱かせる効果をもつただろう。年配のヨーロッパ人女性が、たとえば写真31のようなポーズをとることは考えられないことであるから。

写真32の絵葉書では、パイプをくわえた女が片肌ぬいで写っている。ここで興味深いのは、写真そのものよりも、この絵葉書が、シドニー在住のアーサーという男性によって、1913年に、イングランドにいる母親あてに出された、という事実である。これは自分の母親に送る絵葉書としては奇妙な選択に思える。この事例が個人的趣味の極端なケースでないとすれば、こういうことであろう。つまり、当時、多くの人々は、アボリジニ女性を【ヨーロッパ人女性とは】完全に異なったものとして意識していた。したがって、その裸は、良俗を脅かすようなものではなかったのである。少なくとも、この送り手がこの写真をいやらしいものと考えなかったことだけは、確かである。

アボリジニ女性に対する社会意識にひそむ根底的な曖昧さが、写真33の事例では、極端な形であらわれている。上半身はだかの若い女性が頭の上に食料をのせる台板をかかげ、そこには死んだコアラが横たわっている、という構図である。標題は「美味しい御馳走」(A Dainty Dish)<sup>22)</sup>。

22) [訳注] この合成写真をみたヨーロッパ人男性が、コアラとアボリジニ女性とどちらに食指をそられるか、つまり、「御馳走」が意味するものは何か、という両義性が仕組まれている。もちろん、現実には、コアラが食用に供されることはない。

## VI. 結 論

今世紀のはじめまでには、先住民アボリジニは、もはやオーストラリア東部のヨーロッパ人社会を脅かす存在ではなくなっていた。実際のところ、大部分の都市居住者にとって、アボリジニというのは目にふれない存在であったため、すでに当時でさえ、アボリジニについての知識は、伝え聞き、新聞・本、あるいは絵葉書の写真などを媒介として、間接的に得るものでしかなかった。

絵葉書によって人々のあいだに広く流布したアボリジニの写真イメージは、当時の主要な人類学文献であるスペンサーとギレン [SPENCER and GILLEN 1899] やロウス [ROTH 1897] らの大部の報告に掲載された写真イメージとは、きわめて異なるものであった。これら人類学の古典的著作では、伝統文化を維持していた先住民社会の活動、とりわけ宗教儀礼の記載が中心であった。したがって、人類学者の報告写真では、アボリジニは全裸であることが多く、また、ほとんどの場合、男性だけ、あるいは男女の集団が被写体であった。彼らはヨーロッパ物質文化に由来するものを全く身につけていなかった。これら人類学者の写真が絵葉書として出廻ることはまず無かったし、豊かな伝統をほこるアボリジニ社会がオーストラリアに存続していることを伝えるような絵葉書も、当時、きわめて稀であった。

人類学者の伝えるイメージが、“古代の”社会制度の起源、なかでも宗教の起源に関心をいだく書斎派インテリたちにもてはやされる一方、一般社会は絵葉書によるイメージをもてはやしていたのである。写真絵葉書が伝えるアボリジニのイメージは、アボリジニ社会が活力をもっていることを人々に知らせるという役割を果たすことはほとんど無かった。むしろ、東海岸をはじめとする主要都市部の住民の日常体験にねざした観念、つまり、アボリジニは死に絶えつつあり、それが証拠に、彼らの姿はしだいに見あたらなくなってきた、という既成観念を強化する役割を果たしたに違いない。この「見えないアボリジニ」(invisibility) という現象は、1897年以降、いっそう顕著なものとなった。保護干渉主義的な立法措置により、ヨーロッパ人が多く住む地域周辺のアボリジニは、次々と保護地へ移動させられたからである。

当時の人々が、絵葉書写真の映像を、アボリジニ社会の没落の証拠と見たことは間違いない。なにしろアボリジニの陰惨な生活状況を連想させる写真ばかりだったのである。また、当時流布していた社会進化論的な思考法が、このような理解のしかたをいっそう促したことも、疑いえないところである。絵葉書のイメージは、先住民社会

がどうしてもなく衰退していく証拠写真として読まれただけでなく、その衰退の理由をも暗に説明するものとして受入れられたのであった。

アボリジニの子育てはもっぱら生物学的な行動と看做され、社会的な活動としては評価されなかったようである。かくして、アボリジニの人々は、ちゃんとした母親としての役割を果たしえないものと看做され、さらには、アボリジニの女には一般に愛情が欠如している、という連想をもよんだ。このような先入観は、アボリジニは整った家族をもたないという別の先入観<sup>23)</sup>と組合わさり、その原因は女性にあるという偏見まで生むことになった。

アボリジニの家族生活を破壊する中心的な役割を演じたのがヨーロッパ人の男たちだった、という点が、まったく人々の口にのぼらなかつたのは、当時の *The Bulletin*誌<sup>24)</sup>の記事が指摘するように [EVANS *et al.* 1975:362], 礼節ある社会の“たしなみ”(Good taste in polite society) というものだったのだろうか。しかし、絵葉書という大衆的な空間では、アボリジニ社会との性的な関係ははるかに公然とあつかわれる題材であった。それが、穏やかに形をかえて表現されたとしても、である。たしかに、アボリジニ女性を撮った写真の多くは、彼女らの「女らしさ」の欠如と「魅力」の無さを際立たせることによって、ヨーロッパ人とアボリジニのあいだに社会的な距離を創出・維持することを狙ったようでもある。しかし、一方で、一部の写真、標題、文通の内容は、アボリジニに対する強い性的興味を潜在していたことを暴露している。

結論として、次のように言うことができる。絵葉書写真に描かれたアボリジニのイメージは、アボリジニ社会に対する当時の人々の見方・考え方を反映するとともに、それを一層強化するものでもあった。それは、アボリジニに対する苛酷な扱いを正当化し、また、それについての罪の意識を軽減するものであった。アボリジニは乱婚的であると看做された<sup>25)</sup>ばかりか、アボリジニの女性とその子供の関係は、「母子関係」と呼ぶに値しないとされたのであった。このような見方が、「アボリジニの女は醜い」という通念と組み合わさった結果、ヨーロッパ人男性によるアボリジニ女性の著しい性的搾取を容認するような社会的土壌が形成されたのである。そして、それがまた、

23) [訳注] アボリジニの「家族」をめぐる偏見・先入観(たとえばアボリジニが「乱婚」的だとするイメージ)については、本稿のもとになった口頭発表論文 [PETERSON 1989] で論じられている。ただし、今回、訳出にあたっては、その部分は原著者によって削除省略された。

24) [訳注] *The Bulletin* は現在も続いている週刊新聞。1880年創刊。現在とちがって、1900年頃は、当時としては急進的な共和主義・自由主義の論調をとる政治・社会批判が特徴であった。

25) [訳注] 注23を参照。

当時、アボリジニ社会をさらに圧迫し攪乱する要因となっていった。先住民アボリジニが当時こらむった問題のほとんどがヨーロッパ人によって引き起されたものであることは、今となっては、明白な事実である。しかし、絵葉書によって広められ強められたような見方や考え方は、当時の人々をして、あたかもアボリジニの側に問題の原因があったかのように感じさせる作用を発揮した。その結果、ヨーロッパ人とアボリジニのあいだの搾取的な関係の本質は隠蔽されたのであった。

## 謝 辞

This paper is a modified version of a paper prepared for and presented at the conference: "Film and the Humanities—Coming to Terms with the Photographic Image" at the Humanities Research Centre, Australian National University, 4-6 July 1989. I am also most grateful to Komei Hosokawa for the care and interest he has taken in making the translation.

Nicolas Peterson, 2 August 1990, Canberra

## 文 献 (訳者による追加分を含む)

- ALLOULA, M.  
1987 *The Colonial Harem*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- EVANS, R.L., K. SAUNDERS and K. CRONIN  
1975 *Exclusion, Exploitation and Extermination: Race Relations in Colonial Queensland*. Sydney: ANZ Books Company.
- HOWITT, A.  
1904 *The Native Tribes of South-East Australia*. London: Macmillan.
- MULVANEY, D. J., and J. H. CALABY  
1985 *So Much That is New: Baldwin Spencer 1860-1929—A Biography*. Melbourne: Melbourne University Press.
- PARTRIDGE, E.  
1984 *A Dictionary of Slang and Unconventional English* (8th edition, completely revised by Paul Beale). London: Routledge and Kegan Paul.
- PETERSON, N.  
1989 Constructions of Aboriginal Femininity and the Family in Early Twentieth Century Photography, paper read at the conference: *Film and the Humanities—Coming to Terms with Photographic Image*, Humanities Research Centre, Australian National University, Canberra, 4-6 July 1989.
- ROTH, W. E.  
1897 *Ethnological Studies Among the North-West-Central Queensland Aborigines*. Brisbane: Government Printer.
- SPENCER, W. B. and F. J. GILLEN  
1899 *The Native Tribes of Central Australia*. London: Macmillan.
- STEELE, V.  
1985 *Fashion and Eroticism: Ideals of Feminine Beauty from the Victorian Era to the Jazz Age*. New York: Oxford University Press.

WALKER, Geoffrey, and Ron VANDERWAL (eds.), introduced by J. Mulvaney  
1987 *The Aboriginal Photographs of Baldwin Spencer*. Melbourne: Viking O'Neil.



写真1 "Aborigines, Their First Photo"



写真2 "Mummy's Boy-Lake Tyers"



写真3 (標題なし)



写真4 "Maggie and twins, of Lake Tyers"



*1904 Australian Aboriginal Lubra and Piccaniny  
with love from Sadie*

写真5 “Australian Aboriginal Lubra and Piccaniny”



写真6 “Lubra and Picanniny”



*North Queensland Natives*

写真7 “North Queensland Natives”

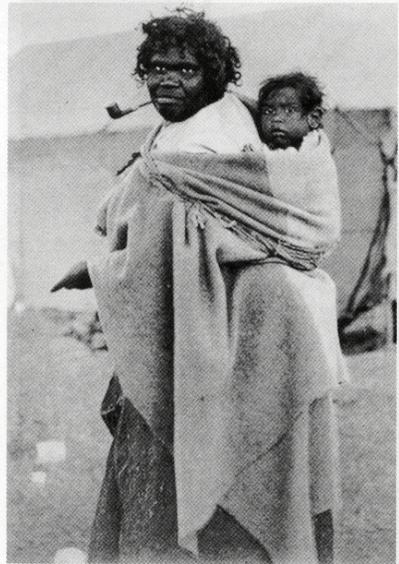


写真8 “Lubra and Child, River Murray, S.A.”



写真9 "An Australian Aboriginal woman"



写真10 "She was fair, as fair could be"

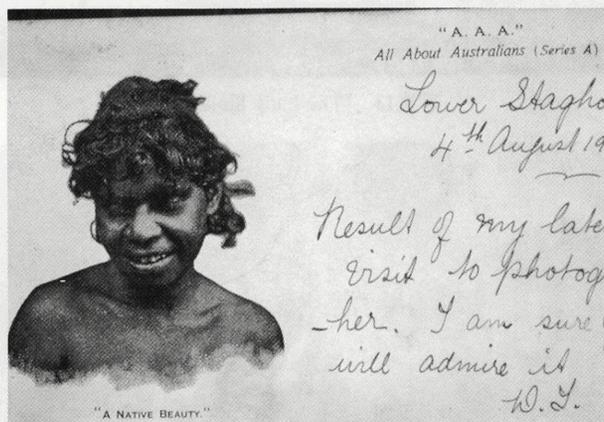


写真11 "A Native Beauty"



写真12 “Types of Australian Beauty”

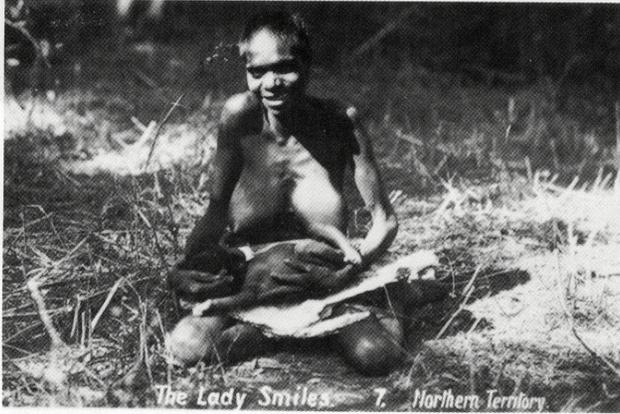


写真13 “The Lady Smiles”



写真14 “A Typical Scene. N. S. W. Aboriginal Lubras and Dog”



写真15 (標題なし)



写真16 "Kitty, of Lake Tyers"

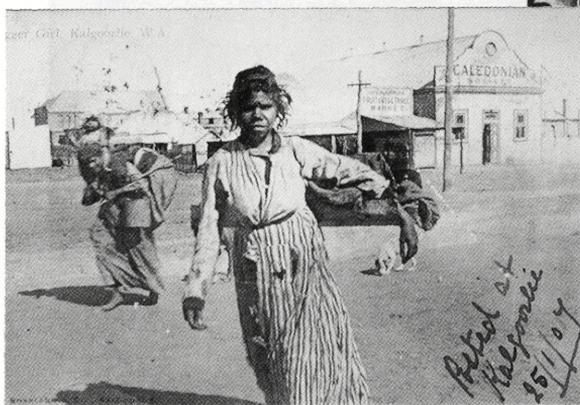


写真17 "Nigger Girl, Kalgoorlie"